

海岸林再生プロジェクトから見た「生」

海と町、その間で存在感を放ちつつ、周囲に溶け込むかのように広がる深緑。この本を初めて手に取った時、幾度か飛行機から見た情景を思い出した。「あの緑は松林だったのか」私がこの本を読み始めて最初に感じたことである。東日本大震災が起こった当時、私は小学校低学年で地元福岡県の小学校にいた。ヘリコプターから撮影された津波の映像をテレビで見て、何が起きているのか理解できなかったことを覚えている。津波を意識したことは全くなく、ゆえに海岸林に目を向けたことなどなかった。海岸林について、その意味と想いを初めて知ることになった。

この本には多くの人が登場する。震災当日の状況をはじめとして、プロジェクトにおける立場や関わり方、考え方、海岸の松林への思い入れなどはそれぞれ異なっており、その事実が丁寧に、真直に描かれている。ヘリコプターから撮影した映像を見ただけでは到底分からない、被災者一人一人の震災の日。どのように生きてきて、その日どこにいて、誰といて、どのように被災したのか。被災者一人一人の「生」がそこにあったということ、このプロジェクトが決して一つのものによって進んできたのではなく、オイスカの方をはじめ、被災者や企業、行政、ボランティアなど多くの人によって進められてきて、これからもその繋がり広がっていくのだろうということに気付かされた。同時に、私自身はこれから宮城県でどのように生きていくのかを考えるようになった。オイスカ海岸林担当部長の吉田俊通さんはこのプロジェクトについて、「なぜ思いついたのか、いまだにわからない。思いつく理由がなかったから」という。震災当時は名取から遠く離れた地において日常生活が続いていた中で、海岸林に関する知識がほとんどない状態からプロジェクトを思いついたという。そして、その真っ直ぐな心と行動力でプロジェクトをスタートさせ、導いてきたという。オイスカは華やかさや資本にとらわれず、真っ直ぐにプロジェクトを始めた。被災者が大きな資本の復興計画に翻弄されることもあった中で、避難所の体育館で地区の役員らとの話し合いを進めたという。私はこのような真直な行動と想いに心動かされた。私自身が行動する大きな原動力となった気がする。

この松林に足を踏み入れたい。松によって繋がれていく未来を私も築いてゆきたい。この本を閉じた時、確かな思いを感じた。